

原著論文

地域で生活する精神障がい者のストレングスを
高めるケアに取り組んでいる看護師の姿勢
— 6つのテーマに焦点をあてて —

**Attitudes of Nurse, who to Enhance the Strength of
Mentally Disabled Persons Dwelling in the Community
— Focusing on six themes —**

塩見理香 (Rika Shiomi)*

畦地博子 (Hiroko Azechi)*

要 約

本研究の目的は、地域で生活する精神障がい者のストレングスを高めるケアに取り組んでいる看護師の姿勢を明らかにすることである。精神科地域看護を経験する看護師6名に半構成的インタビューを行い、質的帰納的研究を実施した。

その結果、地域で生活する精神障がい者のストレングスを高めるケアに取り組んでいる看護師の姿勢として【人との多様なつながりが地域生活を豊かにすることができるという姿勢】【目標をもち、自信を取り戻すことにより自ら歩むことができるという姿勢】【失敗を含め様々な体験を得ることで、学ぶことができるという姿勢】【一社会人として、責任を返していく姿勢】【ストレングスは必ず存在するものであり、かつ変化するものであるという姿勢】【強さだけでなく弱さやどろどろした人生のプロセスを受け止めるという姿勢】の6つのテーマが抽出された。

Abstract

This research is to clarify the attitude of mental health nurses who attempt to provide care which may enhance the strength of mentally disordered living in the community.

The data was collected by semi-structured interview with 6 nurses who had experience in providing mental health care in the community so that themes can be abstracted from the data by using qualitative-inductive design.

In consequence of analysis of the data, 6 themes were identified, which are composed of the following: 'diverse interpersonal relationships enrich the life in the community', 'having a goal helps recovery of self-confidence and independent way of living', 'various experiences including failures offer opportunities to learn something', 'the importance of mentally disordered as citizen and charging them proper responsibility in the community', 'human beings have an inherent strength which is flexible in nature' and 'an affirmative stance to accept negative and complicated patterns of life of the mentally disordered.'

キーワード：ストレングス 地域生活 精神障がい者 看護師の姿勢

I. はじめに

精神科医療は、2004年9月の「精神保健医療福祉の改革ビジョン」や2010年度の「精神保健医療福祉の更なる改革に向けて（今後の精神保健医療福祉のあり方等に関する検討会）」の報告書の提言により、「精神障害者地域移行・地

域定着支援事業」を行い、「入院生活」から「地域生活」へと移行している。^{1)~4)} そのため、地域で生活する精神障がい者への支援体制を整える必要があるが、人材不足や地域資源の不足などにより、十分な支援体制が整っていない現状である。精神障がい者が地域でその人らしく生活していくためには、患者自身が病気や症状・

*高知県立大学看護学部

治療との付き合い方を知ることや失敗ができる安心の場があること、他者との関係の構築ができること、自分の生活に満足することが重要である。^{5)~7)} すなわち、地域生活の看護支援については、病気や病状の付き合いを基盤とし、その人の個性を活かしたその人らしい生活が送れるように支援することが重要である。

濱田ら⁸⁾は、「当事者のストレングスに着目して精神科訪問看護を行っている」と述べ、小澤⁹⁾は、「援助場面で本人のストレングスを引き出すこと」と述べており、ストレングスの視点でケアを実践していることを説明している。また、Rappら¹⁰⁾は、「私たちが問題よりも可能性を、強制ではなく選択を、病気よりもむしろ健康を見るようにする。それらを見ることができれば成果が得られよう。」とストレングスモデルの効果を述べている。このように、地域生活を営むためには、精神障がい者の問題点に焦点をあてるのではなく、能力や希望などに焦点を当てることで、もっている力を引き出し、自己決定できるように支え、その人の望む生活が送れるように支援することが重要になってきている。

また、近年、「リカバリー」や「エンパワメント」を進めていくケアが重要視されるようになってきている。しかし、それらのケアを進めていくためにはベースであるストレングスを見出すことが必要になってくる。「リカバリー」も「エンパワメント」も精神障がい者のストレングスを結集することにより成り立っていると言っても過言ではないと考える。

以上のことから、ストレングスの視点で地域精神看護を実施していくことが必要不可欠であると考えられる。そのため本研究は、地域で生活する精神障がい者のストレングスを高めるケアに取り組んでいる看護師の姿勢を明らかにすることを目的とした。

II. 用語の定義

本研究における「ストレングス」とは、本人、家族、グループ、コミュニティがもっている固有の総合された力であり、精神障がい者が望む方向に向かって培われていく強さとして、生活

経験の中で生成・発達するとした。

また、「看護師の姿勢」とは、ストレングスを高めるケアを行っていくための看護師の態度、価値観、倫理的配慮、知識など専門職として看護実践を行う上で基盤となるものであるとした。

III. 研究方法

1. 研究協力者

本研究の研究協力者は、地域で生活する精神障がい者のストレングスを高めるケアに取り組んでいる看護師で、精神科看護の経験が5年以上かつ地域看護の経験が3年以上の看護師とした。

2. データ収集期間

2014年6月～9月実施した。

3. データ収集方法

半構成的インタビューガイドを用いた面接調査を行った。地域で暮らす精神障がい者に対する看護を経験したことのある精神科看護師にプレテストを実施し、洗練化に努めた。面接は、1回あたり60分から90分程度であった。

4. データ分析方法

インタビュー内容を逐語録として作成し、その内容の中から地域で生活する精神障がい者のストレングスを高めるケアに取り組んでいる看護師の姿勢について語られている部分を抜き出した。それを1ケースごとに類似した内容のものをまとめ、それらが意味していることを表現し、すべてのケースを比較してテーマを導き出した。

IV. 倫理的配慮

本研究は、研究施設、研究協力者に対し、プライバシーの保護、研究協力や撤回の自由、研究協力における不利益と利益、研究結果の公表の仕方について説明し同意を得た。なお、本研究は、高知県立大学看護研究倫理審査委員会の承認を得て、実施した。

V. 結 果

1. 概 要

1) 研究協力者の概要

研究協力者6名は、全員女性である。年齢も40歳代から50歳代で、看護師経験も全員が10年以上であり、精神科看護歴も9年から22年と経験も豊かであった。また、職務としては6名中4名が管理職であり、そのうち精神看護専門看護師（以下CNS）が2名、退院支援の認定看護師が1名である。教員経験のある方も含まれており、今回の研究協力者は専門性が高い集団であることが特徴である。

2) 語られた当事者の概要

語れた事例は10例であり、疾患名として統合失調症が多いが、発達障がい、気分障がいなども含まれている。男女比としては4：6で女性が多く、年齢としては、20歳代から60歳代である。当事者の年齢が高くなり、キーパーソンが一等親から三等親に移行している当事者も見られ、家族員の高齢化に伴い家族に構造変化が見られている。また、自力で生活を営む必要性がある独居生活の方が6名であった。地域での生活年数については、短期入院（休息入院など）などが含まれるが、長期間地域生活をされている方が主で、20年間地域生活をしている当事者もいた。

2. 地域で生活する精神障がい者のストレン

スを高めるケアに取り組んでいる看護師の姿勢

分析の結果、地域で生活する精神障がい者のストレンスを高めるケアに取り組んでいる看護師の姿勢として【人との多様なつながりが地域生活を豊かにすることができるという姿勢】

【目標をもち、自信を取り戻すことにより自ら歩むことができるという姿勢】【失敗を含め様々な体験を得ることで、学ぶことができるという姿勢】【一社会人として、責任を返していく姿勢】【ストレンスは必ず存在するものであり、かつ変化するものであるという姿勢】【強さだけでなく弱さやどろどろした人生のプロセスを受け止めるという姿勢】の6つのテーマが抽出された。

1) 【人との多様なつながりが地域生活を豊かにすることができるという姿勢】

このテーマは、当事者を取り巻く人たち同士のつながりや当事者と当事者を取り巻く人たちのつながりが地域生活を営む当事者のストレング스에影響を与えることができると考え、人と人がつながることを大切にしている姿勢である。

B看護師は、統合失調症の女性とのかかわりにおいて‘彼女は料理がすごく上手だったんです。一緒に料理を作る場面とかで、より強めていったって感じがな’と、支援者と当事者の協働によりストレングスの育成や強化をすることができるという姿勢でかかわっていた。

また、家族間同士のつながりについて、‘家族の強みも本人の強みも埋もれていたもので、家族の強みを引き出す、本人の強みも引き出す、その両方を私が橋渡しになって伝える’‘家族って悪いところが目立つってというか、いいところが認め合えないってというか（中略）そこを見直すことによってお互いの見方が変わったり、お互いを大事にしあう思いが芽生えるってというか’と、当事者を含めた家族員の相互のストレングスに注目し、相互作用の中でストレングスを高めていくと捉えていることを語っていた。当事者と当事者を取り巻く人たちがつながることによりお互いのストレングスが影響しあうことができるという姿勢でかかわっていたといえる。

2) 【目標をもち、自信を取り戻すことにより自ら歩むことができるという姿勢】

このテーマは、看護師の支援を受けて自信を取り戻すことで当事者は目標をもち、自ら歩むエネルギーを得ることができるという姿勢である。

E看護師は、アスペルガー障がいの男性で単身生活を送っている当事者について語ってくれた。当事者は、東京で正職員となり、高層マンションに住んで、結婚をするという夢をもっており、‘強みじゃない。夢がある。どうなりたいたい姿がある。やっぱり人間、それが見据えられるからがんばれる’‘なりたいこと視野に入れつつ（中略）それに向かってがんばれることは一つのエネルギーだし’と語り、目標や希望は当事者のエネルギーになるという姿勢でかかわっ

ていた。

また、‘納得させれば絶対に聞いてくれる人。だからくどくどこだわっているというってことは、こちらの説明が悪い’と、看護師が丁寧な説明をすることで、行動変容につながるということを語っていた。また、‘誰でも、認めて欲しいじゃないですか。そのほうが、彼はがんばれる人。怒ったり、直接対決するより、こうだよねって受け入れてあげるほうが、こっちの言うことも聞いてくれる’と、看護師が当事者の行動を後押しするために、分りやすく、納得のできる説明や肯定的なフィードバックを実施するかかわりを大切にすることで、自信を取り戻すことができるという姿勢を語っていた。

体重の増減に気持ちが取られ、自分の今後の方向性を決めることができない摂食障がいのある当事者のかかわりで、‘(看護師は)保護して、責任を負ってあげるほうがいい時期はありますよね。そんなときはもちろん負いますよ’ ‘あなたがすべきことをやって私がすべきことをやりますよっていうスタンスなわけ’と語り、当事者の症状や状態のレベルに応じて、当事者が今使えるストレンスを最大限に発揮できるようにかかわることが看護師の役割であるという姿勢を有していた。

3) 【失敗を含め様々な体験を得ることで、学ぶことができるという姿勢】

このテーマは、例えば失敗をしたとしても、当事者は積極的にチャレンジすることで、今まで経験したことのない新たなストレンスと出会うことができるという姿勢である。

C看護師はデイケアに通所している20歳代の統合失調症の女性について語ってくれた。10歳代前半に発症し、社会経験も少なく、新たなことを獲得することに対して臆病になっていた当事者が、仕事に行きたいと希望したとき ‘悪くいくと悪化するかもしれないけど、事業所に行こうって彼女が決めたんだったら、行かしてあげたいなって、すごく。統合失調症の彼女が自分で選択するのは難しいけど’ と語り、病状が悪化する可能性もあるが、当事者が自己決定したのであれば、例えば失敗しても体験したことに意味があるという姿勢でかかわっていることを

語っていた。また、‘一回できたことを次につなげていく、行動の般化につながっていくような気がして’ と、一度成功体験を得ると、次も新たなことにチャレンジしたり、応用したりすることができるという姿勢でかかわっていた。そして、‘病状がありながらも、彼女のよさを発揮できる場として、ちょっと母親と離れたほうがいいかなって思って’ と、当事者のストレンスが発揮できるための場所を見出すという姿勢をもってかかわっていることを語っていた。

C看護師は自分のケアの特徴として、失敗を回避しようとする傾向があることを自覚し ‘転ばぬ先の杖にはなりませんよ。一緒に転ぶから(中略)しんどくなったとしても、それはそれで彼女が引き受けんといかんと思っている’ と語り、失敗体験を当事者自身が受け止めることで、新たなストレンスを得ることができるという姿勢でかかわっていた。

4) 【一社会人として、責任を返していく姿勢】

このテーマは、地域生活を行うにあたり、当事者が行った行動については当事者に責任を返すことや地域住民としての自覚をもつことで、ストレンスが備わっていくという姿勢である。

D看護師は、一人暮らしをしながらデイケアに通所している60歳代の統合失調症の女性について、‘一社会人、一地域で生活をしている自分っていうそういうことを大事にしてもらいたいと思っています’ と、当事者自身が地域で生活をしているという自覚をもつことが必要であるということを語っている。また、‘デイケアは治療の場ですからって言うとしんどくなると思うので一社会人としてかかわるって、すごく大事だなって思っている。’ と障がいの有無にかかわらず、地域で生活する人として接するという姿勢でかかわることを大事にしていた。当事者を地域で生活を営んでいる地域住民として対応しようとする思いが表され、当事者に地域生活を送っているという自覚を保持してもらうという思いを語っていた。

また、E看護師は、‘社会で容認されるべきでない方法を行ったときは、それについて説明はするし、ただ、その人の考えや思いを尊重するイコール良しとは思っていない’ と語り、当

事者の思いを尊重することは基本であるが、それが、地域社会の中で容認されないことについては、当事者にその旨を返すということを実施していた。このような働きかけから、社会的な責任を果たすことで当事者は生活をしやすくなると考える姿勢が見出された。

5) 【ストレングスは必ず存在するものであり、かつ変化するものであるという姿勢】

このテーマは、ストレングスは誰にでも備わっているものであり、それは固定されたものではなく、向上することも低下することもあると捉え、その状態に応じて維持継続すること、伸ばし強めることができるようにかかわることを大切にするという姿勢である。

A看護師は、統合失調症で一人暮らしをしている50歳代の男性について、‘デイケアから自宅に帰ってきたとき、家に帰ったらすごくいやな気持ちになるといい始めたんですよ。(中略)それで、部屋のゴミを片付けましょうと片付けをやり始めたんです’と当事者の言動の中から希望を見出していた。また、部屋からビールの空き缶が出てきたときは‘町内会の集まりがあった行ってきたときに貰ったので飲みましたと。(中略)地域の中でいろんな人とつながりながらやり始めている’と当事者の部屋の現状から新たなストレングスを見出していた。これらのデータから当事者のもつストレングスの存在を信じ、様々な場面で当事者のストレングスを見出す姿勢でかかわるA看護師のあり方が見出されていた。

A看護師は、当事者が病状悪化に伴い、人とのつながりを拒否するようになったとき‘できる人だったんだし、(中略)この間、これができていたから絶対その力はあるから(中略)絶対その人はまた、伸びていくと思うんですよ’と以前もっていたストレングスは、再び伸びることができるという姿勢を大事にしてかかわっていた。

6) 【強さだけでなく弱さやどろどろした人生のプロセスを受け止めるという姿勢】

このテーマは、その人の中にあるストレングスを見出すためには、生育歴・生活史を捉え、

それらが現在にどのような影響を及ぼしているのか知ることを通して、当事者の生きてきたプロセスを大事にし、強さも弱さも受け入れていこうとする姿勢である。

F看護師は、気分障がいの当事者が寝たきりで部屋の片付けができないことについて‘部屋の風景全体が、本人の心の中の風景なんですよ。お母さんがなくなっても、数年たってるんですけど、そのことは全く整理がつかないまま、本人の心の中にうず高くある’と、母親の死を受け入れることができないことを理解し、その部分を看護師が受け入れるためにも当事者の背景を理解する姿勢を大事していることを語っていた。当事者の生育歴・生活史から当事者の現状を理解し、核心の思いに迫ることで、当事者の希望や要望・躓きなどを見出そうとする思いでかかわっていた。

F看護師は、抑うつ状態が強い気分障がいやPTSDの当事者について、‘十分にどろどろに付き合った後には、何もしないんですよ。後は本人が自分の力で、趣味とか自分で探し始めるだけなんで’‘こっち(看護師)の防衛のために躁的に本人のいいところに目を向けようとしても決して良くならない’と語っていた。これらの語りから、当事者のストレングスを引き出すためには、当事者の過去から現在にかけての辛さや無念さ、向き合いたくない過去などに付き合うことが大切であり、いいところだけを見ようとするのはそれを妨げると考えているF看護師の姿勢が見出された。当事者の歩んできた人生のどろどろしたところや汚点とされたところを受け入れるという思いでかかわっていた。

VI. 考 察

1. 当事者の弱さに焦点を当てる看護師の姿勢の重要性

今回の研究結果より【強さだけでなく弱さやどろどろした人生のプロセスを受け止めるという姿勢】というテーマから、強さだけではなく弱さにも焦点を当てる看護師の姿勢が見出された。これは、強さだけに注目するのではなく、病気を含めて当事者の背景を見つめ、看護師の価値観に捉われず視点を変更する姿勢の重要性

が示唆されたと考える。

福岡ら¹¹⁾は、摂食障害をもつ人のストレングスを高めるケアとして、看護師は、精神障がい者が本来もっている力が発揮できる状態を整える意図で摂食障害の病理をおさえるケアを提供し、看護師が精神障がい者の病理に振り回されないようにするケアを提供すると述べている。このようなケアを提供するために看護師は病態を理解することが必要となるだろう。今回の研究結果からも、病状が安定しないことに看護師が焦り、ストレングスを探そうとする躁的防衛を行うと、病状を悪化させてしまうことにつながるという看護師がいた。これは、精神障がい者のストレングスを高めるためには、精神障がい者の回復過程を見極め、その回復過程のペースに合致することが重要であるという考えを示している。精神障がい者の背景を十分に受け止めることで、安心感や安堵感を得て、新たな取り組みをスタートさせるきっかけとなると考える。このようなことから、精神障がい者の病態や背景を見出していく姿勢が重要であると言えるだろう。

また、研究結果からも看護師は当事者の弱さとされている点を見ないという考えではなく、弱さを強さに変換することで新たなストレングスを見出すと同時に、弱さを含めた人として、全人的に当事者を捉えることを行っていた。しかしながら、その弱さをそのまま問題点と捉えることは、従来の問題点に焦点を当てた看護ケアとならば変化はない。ストレングスを活かしたケアを行うためには、弱さとされてきた点をリフレーミングすることで、強みに転換していくことも重要となってくる。佐藤¹²⁾は、「リフレーミングの焦点は問題とされている行動そのものではなく、多様な地域生活のあり方を肯定していくなかに存在する。」と述べ、精神障がい者の可能性を引き出すためにも問題点として捉えられていた部分を拾い出し、視点を変換することで新たなストレングスを見出し、ストレングスを増やすことができることを指摘している。

このように、精神障がい者は強さと弱さをもつ人としてそのまま受け入れると同時に、弱さを強さに変換し、新たなストレングスを見出す

姿勢をもつことは、ストレングスを高める上で重要であると考えられる。そのためには、精神障がい者の弱さにも焦点を当てる姿勢をもち、その背景を捉えると同時に、看護師の価値観に囚われることなく、弱さを強さとする価値変換を行うことが必要となってくる。

2. 地域生活でストレングスを高めるケアの姿勢の重要性

今回の研究結果の【人との多様なつながりが地域生活を豊かにすることができるという姿勢】【目標をもち、自信を取り戻すことにより自ら歩むことができるという姿勢】【失敗を含め様々な体験を得ることで、学ぶことができるという姿勢】【一社会人として、責任を返していく姿勢】の4つのテーマからは、地域生活の特徴を捉えストレングスを高めるために利用している看護師の姿勢が明らかになった。ここで見出された地域生活の特徴とは、多様なつながりが得られる環境であること、自立が重んじられる環境であること、豊富な体験ができることであると考えられる。以下に、これらの視点から、地域生活の特徴を捉え利用するケアの姿勢について述べる。

1) 多様なつながりが得られる環境

今回の研究結果により【人との多様なつながりが地域生活を豊かにすることができるという姿勢】というテーマが抽出された。地域生活は、入院生活と異なり医療専門職やそれ以外の人たちなどの多様な人とつながることができる環境である。地域で生活している精神障がい者は、病院関係者や家族だけではなく、就労支援者、地域生活支援センター、精神科デイケア、訪問看護などの支援者や地域住民、他の精神障がい者とのつながりが多様化していく。その人々は、今まで多彩なストレングスを有しており、それぞれがもっているストレングスを引き出し、活用することで地域生活を豊かにすることができる。そして、つながりが多様であればある程、ストレングスの数は増し、お互いがストレングスを活用しながら生活を営むことができると考える。また、活用だけではなく、相互作用によりお互いのストレングスを刺激するこ

とで、ストレングスを高め合うことができると考える。

野中¹³⁾は、地域生活とは、健康だけではなく、住居、食事、仕事、金銭、友人、生きがいなど多様な要素で構成されているため、多職種が力を合わせる必要があるとあり、精神障がい者もチームの一員であると述べており、精神障がい者が地域生活を営むことや、目標や希望を達成するためには、一人の支援者だけではなく、それぞれの支援者の強みを活かし支援していくと同時に精神障がい者も自身の強みを活かして行く必要があると言えるだろう。支援者は、看護師など支援者から精神障がい者への一方向ではなく、お互いが対等に向き合いながら、双方が同じ方向に向き合って目標を達成することが大切になってくる。

このようにことから多様なつながりができる地域生活の環境で、相互作用を活かしながらいお互いのストレングスを高めていこうとする姿勢は、ストレングスを高める上で必要不可欠な姿勢であると考えられる。

2) 自立が重んじられる環境

今回明らかになった【目標をもち、自信を取り戻すことにより自ら歩むことができるという姿勢】は、自立した生活を営むことで、当事者は自ら考え行動することができるようになり、それが自信につながり自尊心を高めることができるようになるという意味を有する姿勢であると考えられる。

林¹⁴⁾は、患者の自立は患者が自分を価値ある人間としてとらえ、自尊の感情をもち、自分が自分らしくあることに意味を見出すと述べ、自立することは、精神障がい者が自分の生活をどのように過ごしていきたいのか、自分の生活は自分で決めて歩むことで、自分の存在価値を見出すことにつながることを指摘している。また、その目標が、達成できることで自己効力感を得ることができ、さらに自立性が高まると考える。そのために看護師は、精神障がい者と実現可能な目標設定を行うことで自立への支援を行っていくことが必要であり、目標達成のための具体的な計画については、精神障がい者が単に自己決定をするのではなく、なぜ、それを選択した

のか考えることができるような支援をすることで、精神障がい者の自立性はさらに高めることができると考える。そして、看護師は精神障がい者に肯定的なフィードバックや承認を実施し、精神障がい者の症状や感情に左右されることなく堂々とした態度で接することで、安心感を提供し自ら歩むことへの後押しを実施することができると言えるだろう。

このようなケアは、自立することが必要不可欠な地域生活だからこそ重点的に展開できるケアであり、ストレングスを高めるために地域という場で、【目標をもち、自信を取り戻すことにより自ら歩むことができるという姿勢】をもってかかわることの重要性が示唆されると考える。

3) 豊富な体験ができること

地域生活では、豊富な体験により新たなストレングスを得ることができるという姿勢が明らかになった。地域生活では、入院と比べ日常生活や就労、他者との交流など多くのことを体験する機会がある。今回の研究では、体験できる機会が豊富に存在している地域生活という場を活かして、当事者に体験を促し、失敗してもなぜ失敗したのか振り返ることにより、新たなストレングスを得ることができるという姿勢でケアを展開する看護師の姿勢が見出されたと考える。

例えば、ある看護師は、当事者が体験したいと自己決定したことについて、失敗する可能性があっても体験をしてもらうということを行っていた。このような介入は、当事者の意欲を尊重し、誰でもチャンスは訪れるという考えをもって行われていた。ここで成功体験を得ることができれば、モチベーションも上がり、達成感につながることも可能となる。しかし、同時に看護師は、もし失敗したとしても、失敗から学ぶことが当事者にはできると捉えていた。看護師は、安心して失敗できる場を提供し、フォローを実施することで、当事者一人で失敗を背負うのではなく、看護師とともに失敗を振り返るという作業を行うことを通して、当事者が失敗から学ぶことができるようにかかわっていた。

濱田ら⁸⁾は「当事者も成功と苦悩を語り筆者らがフィードバックしたことで自分のことを肯

定的に語る場面ができた」述べており、失敗体験を否定しない考え方を示すと同時に失敗しても再びチャレンジできるという可能性を指摘していると考えられる。

このように、地域生活には体験をする機会が豊富にあることを考慮し、【失敗を含め様々な体験をすることで、学ぶことができるという姿勢】をもつことは、新たなストレングスを獲得することができるという視点からも重要であると言える。

3. 地域生活をする社会人として責任を返していく姿勢の重要性

今回の研究結果から【一社会人として、責任を返していく姿勢】というテーマが抽出され、これは、地域生活を行うにあたり、地域住民としての自覚をもち、当事者が行った行動について当事者に責任を返すことで、ストレングスが備わっていくと捉える看護師の姿勢である。責任とは広辞苑¹⁵⁾によると、「①人が引き受けてなすべき任務②政治・道徳・法律などの観点から非難されるべき責・科」と記載されている。この責任は概念枠組みでは抽出されなかった構成要素であると言える。今回の研究結果で責任という要素が新たに抽出されたのには、地域生活では、自ら考え行動することが必要とされており、その行動の結果は、当事者が引き受けなければならないということによると考えられ、まさに、地域看護を提供する看護師ならではの視点であると考えられる。

本研究結果からも、当事者が社会的ルールや法律が守れないときなどは、当事者に責任を取ってもらうということを語っており、当事者の行った行動について責任は当事者にあるという考えをもっていた。責任が生じることで精神障がい者は、自らの行動の変容を行うことができ、ストレングスを高めることができると考えられる。また、自ら責任を取ったからこそ、その努力や成果は精神障がい者のものであり、そこから自信につながり、ストレングスを高めることになると考えられる。精神障がい者がストレングスを高めるためにも責任は精神障がい者自身がつことが必要であると考えられる。

VII. 結 論

地域で生活する精神障がい者のストレングスを高めるケアの姿勢として、【人との多様なつながりが地域生活を豊かにすることができるという姿勢】【目標をもち、自信を取り戻すことにより自ら歩むことができるという姿勢】【失敗を含め様々な体験をすることで、学ぶことができるという姿勢】【一社会人として、責任を返していく姿勢】【ストレングスは必ず存在するものであり、かつ変化するものであるという姿勢】【強さだけでなく弱さやどろどろした人生のプロセスを受け止めるという姿勢】6つのテーマが抽出された。

また、以下の5つのケアの姿勢の重要性が示唆された。まず、精神障がい者のストレングスを高めるためには、強さだけではなく弱さにも焦点をあてる必要性が示唆され、精神疾患の病態特性を理解しその辛さなどを受け止めることや弱さを強さにするという価値変換を看護師は行うことが必要であると考えられた。さらに、地域生活の特性を効果的に利用するためには、地域で得られる多様なつながりを大切にす姿勢、精神障がい者の自立を重んじる姿勢、豊かな体験を利用する姿勢が重要であると考えられた。これらのケアの姿勢を有することにより、当事者のストレングスを高めることにつながると考えられる。

謝 辞

本研究に快くご協力いただきました研究協力者の皆様、各施設の皆様、ご指導賜りました先生方に心より感謝いたします。なお、本研究は高知県立大学看護学研究科博士前期課程の修士論文に一部加筆し修正を加えたものである。

<引用文献>

- 1) 厚生労働省ホームページ：「精神保健医療福祉の改革ビジョン」<http://www.mhlw.go.jp/topics/2004/09/tp0902-1.html>, 2004.
- 2) 厚生労働省ホームページ：「精神障害者地域移行支援特別対策事業」http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/service/dl/chikiikou_01.pdf, 2011.

- 3) 厚生労働省ホームページ：「精神保健医療福祉の更なる改革に向けて」
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/09/s0924-2.html>、2009.
- 4) 厚生労働省ホームページ：「地域定着支援の手引き」
<http://www.mhlw.go.jp/kokoro/common/pdf/4-03-1area.pdf>.
- 5) 下原美子：地域で生活する統合失調症患者の主観的QOLの実態と精神科訪問看護との関連、日本精神保健看護学会誌、21(1)、1-11、2012.
- 6) 関根正：精神障害者の地域生活過程に関する研究－出身地域以外で生活を送る当事者への支援のあり方－、群馬県立県民健康科学大学紀要、6、41-53、2011.
- 7) 八木こずえ、鈴木麻記子、坂井美加子ほか：青年期統合失調症患者の生きにくさと看護援助の方法－自我強化に焦点を当てた看護面接を通して－、日本精神保健看護学会誌、17(1)、12-23、2008.
- 8) 濱田淳子、與那覇五重：訪問看護師が感じた利用者の「もてる力」、日本精神科看護学会誌、52(2)、332-336、2009.
- 9) 小澤壽江：精神科リハビリテーションにおける援助の考察 利用者がいきいきとした生活を送れるようにストレングスモデルとICFの概念を取り入れた評価表を使用した援助の実際、日本精神科看護学会誌、51(3)、209-213、2008.
- 10) Rapp, C.A. & Goscha, R.J.: The Strengths Model A Recovery Oriented Approach to Mental Health Services Third Edition (3rd), 2012. 田中英樹訳：ストレングスモデル リカバリー志向の精神保健福祉サービス、第3版、金剛出版、45-377、2014.
- 11) 福岡雅津子、畦地博子：摂食障害をもつ人のストレングスを高めるケア、高知女子大学看護学会誌、38(1)、61-67、2012.
- 12) 佐藤光正：ケアマネジメントにおける看護師の役割の期待、病院・地域精神医学、52(4)、260-262、2010.
- 13) 野中猛：多職種連携の技術 地域生活支援のための理論と実践、第3講 力を合わせる、中央法規、53-57、2014.
- 14) 林和功、宮本眞巳編集：改訂 精神看護学、V再適応への援助 2看護的な援助方法 4. 対象の自立を支援するために、中央法規、265-281、2009.
- 15) 新村 出編：広辞苑、第6版、岩波書店、1232、1564、2011.